

目次

まえがき	iii
本書の構成	v

第Ⅰ部 はじめに

1章 大震災を受けて考えるサステナビリティ学	3
1. 課題解決型学問としてのサステナビリティ学	3
2. 震災を受けて今何が問われているか	8

第Ⅱ部 リスクに対応する社会

2章 東日本大震災の記録と教訓	13
1. はじめに	13
2. 津波の速さを見積もる	13
3. 自然災害の「素因」と「誘因」を知る	16
4. 大地の成り立ちと土地利用の歴史を知る	18
5. 科学の「知識」を生きるための「知恵」に変える	20
6. 今後求められる自然災害への「備え」とは	21
7. おわりに	25
コラム1 「先生と子どもたちで作る防災マップ」作成支援事業	26
コラム2 茨城史料ネットの被災資料救済・保全活動	27
3章 気候変動と自然災害への対応	29
1. 気候変動の影響	29
2. 気候変動への適応策	32
3. 災害リスク低減（防災・減災）	35
4. 気候変動適応と災害リスク低減	37
コラム3 気候変動適応策の現状	41
4章 工学技術への正当な信頼を築くために	43
1. 具体的に有効な対策を可能にする工学技術なのに	43

2. 「お任せ」の誘惑	44
3. 「お任せ」の失敗と信頼の揺らぎ	48
4. 「お任せ」と「自己判断」の共通性	50
5. 工学的議論と外部の議論の支え合い	51
6. 対話と信頼のネットワークへ	53
7. リスクへの社会的対応における工学技術者と工学技術の位置	55
コラム4 茨城県の生活環境圏におけるCO ₂ 濃度計測	56
コラム5 学校安全・防災訓練	57

第Ⅲ部 自然共生社会の実現に向けて

5章 持続可能な農業と自然共生	61
1. はじめに	61
2. カバークロップ利用による持続的農業	64
3. 自然と共生する農業	66
4. 放射能汚染と地域農業	68
5. 地域農業から始まるサステナ	71
6. まとめ	72
コラム6 内モンゴルにおける草地保全と持続的利用	73
コラム7 小規模水田の生産効率の向上を目指して	74
6章 自然共生の新しい姿	77
1. はじめに	77
2. 塩害と微生物共生	80
3. レメディエーションと微生物共生	82
4. 実現可能な技術に向けて	84
コラム8 生きものへの適応策	86
コラム9 Local Wisdomと農業の持続可能性	87
7章 自然エネルギーの可能性	89
1. 持続可能なエネルギー利用とは？	89
2. 自然エネルギー利用の姿勢	92
3. 自然エネルギー利用のかたち	98
4. 自然エネルギーを持続的な地域づくりに活かす	103

第IV部 新たな市民社会のあり方

8章 被害の不平等性……………	109
1. 東日本大震災と障害者	109
2. 発達障害の当事者と避難所	111
3. 「災害時要援護者」への特別な対応の開始	115
4. 地域のネットワーク形成と現場の工夫が重要	118
5. 災害時にも安心して避難できる「コミュニティ」を創る	120
コラム11 広域避難者の支援ネットワーク……………	121
9章 市民運動論……………	123
1. 科学・技術と市民の関係の「問題化」	123
2. 放射線被曝リスクに対する認知主体性の回復過程	127
3. 不安に基づく連帯と政治的行動化に伴う新たな課題	134
コラム12 飯館村における現場有機資源を用いた農地再生への試み……………	139
コラム13 サステナのために「やっかいな放射線と向き合う」……………	140
10章 震災後のコミュニティの課題……………	141
1. はじめに：「絆」への若干の違和感	141
2. 被災地におけるコミュニティ	142
3. 社会的ネットワークが果たす役割	145
4. つながりをつくる対話への参加	149
5. おわりに：新しい安心・安全社会への展望	153
コラム14 学問と社会との壁を越えるワークショップ……………	155

第V部 おわりに——復興、持続可能な社会に向けて

11章 サステナビリティ学教育……………	159
1. はじめに	159
2. サステナビリティ学の素養	161
3. 茨城大学大学院サステナビリティ学教育プログラム	164
4. 教育手法：講義、演習等の特性とそれぞれの役割	166
5. おわりに	168

コラム 15 戸惑いから紡ぎだされる国際実践教育演習	170
コラム 16 教育の場にサステイナビリティの視点を	171
12章 サステイナビリティ学は何ができるか	173
1. 東日本大震災後の社会状況のなかで	173
2. ポスト震災社会におけるサステイナビリティ学	175
3. これからの大学が果たすべき役割	177
4. 「ポスト『ポスト震災社会』」の予感：まとめに代えて	179
あとがき	183
引用文献	185
索引	193
執筆者プロフィール	197